The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デザイン哲学の陥穽 : スローターダイクにおける「島化」と「泡塊」
Author(s)	田中, 均
Citation	a+a 美学研究. 2019, 13, p. 120-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90099
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デザイン哲学の陥穽

――スローターダイクにおける「島化」と「泡塊」

田中 均
Hitoshi Tanaka

「スローターダイクはデザインの哲学者である」、これは哲学者・人類学者ブリュノ・ラトゥール（一九四七年―）が掲げたテーゼである。彼は、二〇〇八年の講演「用心深いプロメテウス？ ――デザインの哲学へ向けてのいくつかのステップ（特にペーター・スローターダイクに注目して）」において、自分自身のデザイン概念の定義を示した上で、まさにその定義に即した議論を展開している人物として、現代ドイツの哲学者ペーター・スローターダイク（一九四七年―）を取り上げている。

本稿は、このテーゼについて検証することを課題とする。まずラトゥールがこの講演で示しているデザイン概念の定義を概観する。次に、彼が言及しているスローターダイクの理論が、はたしてこのデザイン概念に合致するのか否かを確かめるため、大著『球体』（Sphären）三部作の第三部にあたる二〇〇四年の著作『泡塊』（Schäume）において、スローターダイクが「島化」（Insulierung）と「泡塊」について展開している議論を再構成する。結論を先取りすれば、スローターダイクの議論は、ラトゥールのデザイン概念とは似て非なるものであり、一種の視野狭窄に陥っている。

Summary

Pitfalls in the Philosophy of Design
— Peter Sloterdijk on “Insulation” and “Foams”

Hitoshi TANAKA

In his lecture on “a cautious Prometheus” in 2008, Bruno Latour defines his concept of design to replace modernist “promethean” concepts such as “construction”, “building” and “revolution”: Design in Latour’s sense is always “re-design”, based on the insight that the nature is already designed by humans and there is no “outside”. Latour calls Sloterdijk “the philosopher of design”, because the latter reinterpreted Heidegger’s theory of “Being-in-the-World” as that on the material formation of life support system, especially “Air Design”. Latour believes that Sloterdijk theorizes the contemporary combination of emancipation and attachment. It is true that Sloterdijk developed in *Foams* (2004) theories of “insulation” and “foams”, formation and co-existence of individual living spaces. However, Sloterdijk ignores poverty and ecological crisis and only praises the rich and spoiling life in developed countries. He corrects his euphoretic view in a lecture on “tool for power” in 2006: In modernity, every individual is forced to strive for more power, but the effort results necessarily in disappointment, while design enables to purchase only “appearance of sovereignty”. I conclude that Sloterdijk is a philosopher of design in negative sense, because he represents two biases on design, euphoria and trivialization.

本稿は最後に、スローターダイクが『泡塊』ののちにデザインについて明示的に取り上げている論考として、二〇〇六年の講演「権力への道具――能力の近代化としてのデザインについて」を検討する[#1]。スローターダイクはこの講演において、一見すると『泡塊』におけるような視野狭窄を免れているかのようであるが、実際には、魅力的な外見という、文字通り表層的なデザイン理解に陥っている。以上の検討に基づいて、本稿は、スローターダイクがデザインの哲学者であるとすれば、それは肯定的な意味ではなく、「デザインの哲学」のありうる陥穽を体現する反面教師としてであると結論する。

「用心深いプロメテウス」としてのデザイン
――ブリュノ・ラトゥールのデザイン概念

ブリュノ・ラトゥールは講演「用心深いプロメテウス?」において、現代の傾向として、デザインの対象領域が拡張していること（extention）、および、デザイン概念がより包括的なものになっていること（comprehension）を指摘している。ラトゥールによれば、デザインはかつて「日常の対象の細部」にかかわるものだったが、いまや「都市、風景、国民、文化、身体、遺伝子、さらに自然それ自体」へと対象領域を拡張している。今日では自然自体が「再デザイン」（re-design）される必要があるとされる。それに加えて、「一方に物質性、他方にデザインという、近代主義に特徴的な分割はゆるやかに解消しつつある」。つまり、従来デザインは対象を表面的に美化するものにすぎないとみなされてきたが、現在ではますます対象の生産の実質に関わるものになってきたのである（CP 2）。

ラトゥールは、デザインがこのように領域的に拡張し、概念的に包括化してきた理由として、デザインの概念が、近代主義の「革命」の概念にとってかわったことを指摘している。彼によれば、「革命」の概念は、確実な事実を認定したうえで、根本的に新たな企てによって問題を決定的に解決しようとするという傲慢な態度に基づいている。これに対してデザイン概念は、複雑化した問題、たとえばグローバルな気候変動に巻き込まれている主体が、多様な関

与者との関わりのなかで漸進的・改良的に振る舞うことを含意するというのである。

ラトゥールは講演のなかでより具体的に、デザイン概念の五つの積極的な含意を列挙している。第一の含意は、「デザインという概念は、「構成」（construction）あるいは「建設」（building）といった言葉にはないような謙虚さを含意している」（CP 3）ことである。このような謙虚さは、「さまざまな環境危機によって、目下の課題の次元がおどろくほど拡張されている時代」において「公衆の意識」に浸透しているものである。

第二の含意は、「**細部**への注意」であって、これはデザインが「アート、スキル、クラフト」といった、しばしば緻密な技巧を表す言葉と結びつくことに由来する。気候変動のような複雑な問題に対しては、細部に注意したデザインが求められるのである（CP 3）。

第三の含意は、デザインは意味に関わるということである。例えばデザインを意味するフランス語「dessin」が、「意図」を意味する「dessein」と語源をともにすることが示すように、デザインは言語的な解釈の対象である。意味の解釈を重視する態度は、私たちの周囲にあるものを、単なる対象としてではなく、「矛盾する事態の複雑な集合」として捉えることを可能にする（CP 4）。

第四の含意は、デザインとは「無からの創造」ではなく、すでに存在する課題に対応したタスクだということである。ゆえにデザインにはつねに「改良的」（remedial）であり、ラトゥールは「デザインすることはいつも**再デザイン**である」と述べる（CP 5）。

第五の含意は、デザインは倫理的な次元に関わるということである。ある物がデザインされているならば、つねに「それが良くデザインされているのか、悪くデザインされているのか」が問題となる。近代主義では、事実は議論の余地なく認定されるものとみなされてきたが、現代の認識では、物事は多様な当事者の関心によって成り立っているため、規範に関わる問いが避けられず、さらには政治的な問いの次元も開かれる（CP 5）[#2]。

ラトゥールは、以上のようにデザイン概念の積極的な含意を列挙した上で、「スローターダイクはすぐれてデザインの哲学者である」と述べている（CP 9）。というのも、ラトゥールによれば、スローターダイクはハイデガーの「世界内存在」の概念を問い直すことを通じて、物質的な世界は人間にとって単なる外部ではなく、人間によってすでに

デザインされたものであることを示しているからである。ラトゥールによると、スロータードダイクは、人間が投じられている「世界」のことを「外被」(enveloppe)としてとらえたが、この「外被」とは、人間を文字通り包み込む物質的環境を意味している。この「物質的環境」とは、人間が(やはり文字通りの意味で)「呼吸」することを可能にする「生命維持装置」である。ラトゥールは、スロータードダイクが『泡塊』において、「外被」の象徴的な事例である宇宙ステーションや宇宙服について論じていることを取り上げている。そして、彼の議論が、「解放(emancipation)と拘束(attachment)の二つの物語がいかにして一つの物語になるのかを示す」ものだと指摘する(CP 8)。「宇宙飛行士が重力から解放されているのは、彼ないし彼女が自分の生命維持装置の外ではほんの一瞬でも生きられない、まさに**それゆえ**である」(CP 5)。つまり人間は「外被」をデザインすることによって、これまで従属していた制約から解放されるが、他方で、この「外被」なしでは生存することができないという点で、新たな従属関係に陥ることになる。

ラトゥールによれば、解放と拘束との同時進行は、気候変動という危機にも見出すことができる。人間はこれまで世界自体を生命維持装置としてデザインしてきたが、いまやその世界が人間自身の生存を脅かしている。現在人間が住まう世界の外部に持続可能な生命維持装置を作ることはできない以上、この世界を「再デザイン」することだけが可能な選択肢である。気候変動がもたらしたことは、「もはや外部は存在しないということに、ゆっくりと痛みを伴って気づくこと」なのである(CP 9)。

スロータードダイクの「島化」と「泡塊」の理論——拘束なき解放の物語

ラトゥールによれば、スロータードダイクは、物質的環境のデザインを通じて人間が解放と拘束の両方を同時に経験するという事態について論じており、それゆえに「すぐれてデザインの哲学者である」。はたしてスロータードダイクは本当に、ラトゥールの評価に合致するような議論を展開しているのだろうか。この問いに答えるためには、ラトゥールが言及しているスロータードダイクの議論を実際に検証する必要がある。そのため本節では、スロータードダイクが『泡塊』で展開している議論のうち、生命維持システムとしての物質的環境の形成に関わる部分を再構成する。その際にはとりわけ、「島化」と「泡塊」の概念が重要になってくる。

ラトゥールは、スロータードダイクが宇宙ステーションや宇宙服を人間にとっての象徴的な「外被」として取り上げていると述べているが、たしかにスロータードダイクは『泡塊』において、宇宙ステーションや宇宙服に言及している。というのも、彼によれば宇宙飛行は、「存在論的観点から見て、人間の条件(conditio humana)の技術的に啓蒙された理論にとって重要」だからである(SC 321)。宇宙飛行は、古くから人間が住まってきた自然の外に出ることによって、外の視点から自然を理解することを可能にする。「慣れ親しまれたものとの協働を解消し、代替の形式を探すことによって、外からの視点が得られる」と彼は述べる(SC 322)。地球の外から見られた自然は、「すでに与えられており自然発生的に住まわれた生命維持システム」として解釈される。真空の宇宙のなかに、一時的にせよ生活可能な空間を作り出すためには、すでに私たちが住んでいる自然を、人間の生命維持のためのシステムとしてとらえて、このシステムが人間のいかなる必要にどのような仕方で対応してきたのかを正確に把握せねばならない。「「生命維持」とはまさに、人間の生活世界が絶対的な島として一時的に稼働可能になりうるための条件のリストを作ることを意味する」と彼は述べる(SC 331)。スロータードダイクはこれらの条件の事例として、「空気、水、ごみのマネージメント」(SC 326)を挙げているが、とりわけ彼は「空気マネージメント」をもっとも基礎的かつ重要な必要としてとらえており、生命維持システムの根本には空間のなかの「空気デザイン」(Air Design)があると指摘している。さて、前の引用における「絶対的な島」という表現が示唆するように、スロータードダイクは、人間が住まうことのできる(つまり生命維持システムが成立している)空間を比喩的に「島」と呼んでいる。そして、そのような意味での「島」を建設することを「島化」(Insulierung)と呼ぶ。スロータードダイクは、「島化」という表現を用いることによって、生命維持システムの構築の過程では、独立した空間を建設することがもっとも基礎的であることを示唆している。島を作ることは、「環境のうちに建造物を置くのではなく、建造物のなかに環境を設置すること」である(SC 330)。スロータードダイクはハイデガーの「世界内存在」の概念をパラフレーズして、「実存する者(wer ek-sistiert)は、本来の自分の場所ではありえないところへ、さしあたり放り込まれている」と述べる。それゆえに、人間は世界の中に「内部空間」(Interieurs)

を形成するよう運命づけられているのである（SC 391）。

スローターダイクは、「島化」の理論において、単独の島の形成だけでなく、複数の島が併存する事態についても言及している。そして彼は、このような事態について論じる際に、また別の比喩的な概念を導入している。それが、個々の「泡」の集合としての「泡塊」（Schäume）である。ただしスローターダイクは、「泡塊」の概念によって、生命維持のための空間が併存するという事態を一般論として表そうとしているのではない。彼はこの概念によって、二十世紀から今世紀にかけて進行した個人主義を空間論的に表そうとしている。フランスの社会学者ガブリエル・タルド（一八四三―一九〇四）は、『模倣の法則』（一八九〇年）において、「今日の文明化された人間は、人間による支援を避けることの可能性を目指している」と述べているが、スローターダイクはこの一節を現代の個人主義の先駆的な表現として引用し、「泡塊」はこうした個人主義に基づくものであると述べている（SC 569）。つまり「泡塊」という概念は、個々人が自分自身のための生命維持空間を作り、そこに住まうことによって、他者から距離をとり自足した生活を送るという、現代の一つの生活様式を含意しているのである。スローターダイクによれば、このような個人主義的「泡塊」を建築として具現化したものが「アパートメント建築」である。彼はその歴史を、ル・コルビュジエの「三〇〇万人の現代都市」計画（一九二二年）における集合住宅に遡る。そして象徴的な事例として、黒川紀章が設計した中銀カプセルタワー（一九七二年）を挙げている（SC 571f.）。

このようにスローターダイクは、「アパートメント建築」のうちに、他者から距離をとり自足した生を送ろうとする個人主義的生活様式を見てとっているが、だからといって、そのような生活様式において、他者との関わりが絶たれて完全に孤独な生が営まれるとは考えていない。泡の集合としての「泡塊」において、泡が隣の泡と表面を共有しているように、「アパートメント建築」の住人は個々の住居単位を独占的に占有してはおらず、すくなくとも隣接する住居単位との「境界壁」を共有している（SC 607）。さらにスローターダイクは、個人主義が進行し自足した生が可能になるからこそ、かえって、他者との関係が特別なものとして注目され、また欲求されることになるという趣旨の議論をしている。例えば彼は、カントの定言命法を変形して、現代における定言命法とは、「汝は他者を必要としないのであってはならない」、あるいは「汝は人間を単に目的とみなすだけではなく、常に手段としてもみなすべきである」と表現できると述べる（SC 489）。

これまで、スローターダイクの『泡塊』における「島化」および「泡塊」の概念について検討した。たしかにラトゥールが言うように、スローターダイクはハイデガーの「世界内存在」の概念を再解釈し、人間が生命維持システムのための空間を生産する過程について議論している。しかしながら、スローターダイクは、ラトゥールが環境危機について述べていたような、解放と拘束との同時進行という事態を取り上げているとは言えない。

そのことを確認するためには、スローターダイクが『泡塊』において、現代の先進国の物質的な豊かさについて論じている箇所に触れる必要がある。スローターダイクは、「泡塊」のなかの一つ一つの「泡」、すなわち「アパートメント建築」のなかの個々の住居単位のなかで営まれる、個々人の自足した生の「快適さ」、そして個人が自分自身に対して行う「甘やかし」（Verwöhnung）を極めて肯定的に捉えている（SC 676ff.）。彼は、このような「快適さ」や「甘やかし」が、二〇世紀後半の先進国の物質的な豊かさによって可能となったものであり、この豊かさゆえに、人びとが自由に自己の可能性を実験的に探究することが可能になったと考えている。スローターダイクはこのような個々人の自己探究の自由を、「空中浮遊」（Levitation）ないしは「軽薄さ」（Leichtsinn）といった言葉で（積極的に）表現している。

その一方で彼は、先進国においてなお、現実に存在する豊かさを否定し、貧困や欠乏を強調する言説が支配的であることを、自己欺瞞として手厳しく批判している。そのような言説の代表として彼は一方で、アドルノら「初期フランクフルト学派」の「批判理論」を挙げている。「批判理論」は、「資本主義における啓蒙は結局いつも形を変えた欺瞞を意味するだけであり、大衆のいかなる富裕化も、結局は装いを変えた悲惨に至るだけである」という議論を展開しているが、これは「凡庸な誇張」にすぎない（SC 675）。また彼は、ブルデューなどを念頭に、「望みのない多くの貧困家計の生存闘争」から現実を読み取ろうとする「社会学的なペシミズム」のことを、「過去五十年の大きな物質的断絶」を考慮せず「見せかけの欠乏」を訴える「業界のルーティーン」と一蹴している（SC 682）。スローターダイクは、環境危機についての言説もまた、彼が「困窮の嘘」と呼ぶものの一変奏として捉えている。彼によれば、「「成長の限界」についての世界規模の議論は、周知のように、古典的な経済的ペシミズム〔…〕をエコロジーの言語に翻訳し、そうして対案となる後継世代を育てることによって、重要なものとなったのである」（SC 700）。

貧困や欠乏を強調する言説に対するスローターダイクの批判は、部分的には有効かもしれない。彼は、先進国の社会に見られる、「強度に防御的な生活態度のなかの、抑うつ的で暴発的な、隠蔽された満足」について語っている（SC 684）。これは、本来は豊かさを享受しており、自らの新たな可能性を実験的に探究できる立場にあるにもかかわらず、そのことを否認している状態である。この状態にある人びとは、常に欠乏につきまとわれているという被害者意識にとらわれ、自分を変革するのではなく、他者を攻撃することだけを考えているわけである。このような態度を批判することにはたしかに意義を認めることができるだろう。

しかしそのことと、社会の中に貧困や環境危機が存在し、しかもそれらが重大な問題であるということを否定することは別の問題である。スローターダイクは、物質的な豊かさを現に享受している階層がその事実を否認する自己欺瞞を批判するあまり、貧困や環境危機の存在自体を否認するか、少なくとも過小評価するという、別の誤謬に陥っているのである。

スローターダイクのこのような短絡的な発想の由来は、彼の「島化」と「泡塊」の概念から導き出すことができる。「島化」の過程で生じた「泡塊」の一つ一つの泡のなかで営まれる個人主義的で自足した生は、その外部にある貧困と危機への視野を狭めてしまう。たしかにすでに見たように、彼は「泡塊」においても「境界壁」は共有されると指摘していた。また、泡のなかの自足した生においては、むしろ他者との関係は特別なものとみなされ欲求されると述べている。しかし、これらの条件には、自足した生が視野狭窄に陥ることを防ぐ力は乏しいと言わざるをえない。まず「境界壁」についていえば、これは一義的には個人の自由に対するやむをえない制約としてあり、個人の視野を拡張する積極的な意義をそれ自体に認めることはできない。また、泡のなかの生においてかえって他者との関係が求められるといっても、自足した生活が前提となるため、関係の多くは選択可能なものとなる。そのような状況で、豊かな生活を送る人びとが、貧困や環境危機によって直接的に生活を脅かされている人びとと関係を取り結ぶ可能性は乏しい。なぜなら、自らとは異質な生を送る人びとと関わることは、自らの生活の条件について省察を促すという点で、不愉快なものにならざるをえないからである。

このように、『泡塊』におけるスローターダイクの議論は、ラトゥールによる評価とは異なって、人間による生命維持システムのデザインの進歩がもたらした解放、とりわけ個人主義的で快適な生の享受にもっぱら注目し、現代社会において人びとが置かれている制約には十分な注意を払っていない。その点でスローターダイクの「デザインの哲学」は一面的なものにとどまっている。

「卓越性の見せかけ」としてのデザイン

スローターダイクは『泡塊』ののち、二〇〇六年の講演「権力への道具」において改めてデザインについて主題的に論じているが、そこでは、先進国における物質的な豊かさの存在を前提として、貧困や環境危機の深刻さを否認するような短絡的な発想を繰り返すことはなく、むしろ現代の社会における個人の無力さに注目している。

この講演でスローターダイクは、（ルネサンス以降の）西洋近代が、個人の能力を絶えず増進させようとする時代であることを指摘する。しかし、このことがかえって、個人に対して「根本的で不可避的な屈辱」をあたえることになる。これについてスローターダイクは以下のように述べる。「個人がより多くの能力を獲得すればするほど、それだけいっそう、個人はゲーム全体のなかのプレーヤーの一人であることも確かになる。個人の能力の範囲がどれだけ大きいとしても、ゲーム全体と比べればつまらないものに見えてしまう」（ZM 143f.）。社会のなかのすべての個人が自己の能力の増進を追求する世界では、多くの個人は、他者との比較のなかで自らの達成に失望せざるをえない、というのがスローターダイクの診断の趣旨である（以上の議論から、無力さの意識はあくまで個人主義的な利害関心の帰結であって、個人主義を越えてより大局的に社会的状況を展望することとは無縁であることがわかる）。彼によれば、こうした無力感から人びとを救済するために「デザイン」が必要とされる。彼はこのような意味のデザインを、「卓越性の見せかけ」（Souveränitäts-Simulation）と呼ぶ。そして彼は、「儀礼の精神からのデザインの誕生」について語る。太古以来の人間は、避けがたい重大なできごと、たとえば近親者の死にさいして、葬送という儀礼を行うことによって、生活の秩序を維持してきた。このように儀礼は、「形式を破壊するもののただなかで形式のうちにとどまる」（ZM 147）ことを

可能にしてきたが、スローターダイクによれば、近代においてはデザインがこの役割を果たしている。この一例として彼は、（一見すると奇妙に思われるかもしれないが）現代の科学技術と人間との関わりを挙げる。多くの人びとにとって、これらの技術の実態は不可解なものであり、技術の産物はいわばブラックボックスである。それにもかかわらず、このようなブラックボックスとしての製品は人びとに使用されねばならない。ここでデザインの出番が生じるとスローターダイクは言う。現代の科学技術の産物は（彼は、「時計、自動車、コンピューター、ゲームセンター、さらに高度な装置等々」を挙げる）、魅力的にデザインされた外見およびユーザーインターフェイスを通じてはじめて人びとを引きつけることができる。このようにスローターダイクによれば、「プロダクトデザイン」とは、利用者の無能を卓越性へと偽装するものにすぎない。「このような視点から見ると顧客とはつねに、卓越性を買おうとする愚者である」（ZM 150）。スローターダイクは「顧客」と「デザイナー」の関係にしか言及していないが、魅力的なデザインを持つ製品を買うことができない人びとには、「卓越性の見せかけ」すら買うことはできないことがうかがわれる。

すでに述べたように、スローターダイクはこの講演では、現代社会における貧困や環境危機の重大さを否定することはなく、むしろ、能力の増大へと駆り立てられた個人の限界に注目している。この点で彼は、『泡塊』における短絡的な発想を免れているように見える。しかしながら、この講演のなかで、「デザイン」はもはや、ラトゥールや『泡塊』におけるスローターダイクが主題としているような、人間の生命維持装置としての世界を作ることというよりもむしろ、人びとを引きつける外面、偽装する見せかけとして規定されている。この点において、デザインをめぐるスローターダイクの議論は、ラトゥールが批判した「近代主義に特徴的な分割」、つまり、対象の実質にかかわらず表面を美化するものとしてデザインを規定する、文字通り表層的な発想にとらわれているのである。

以上の検討から、スローターダイクの「デザインの哲学」は、ラトゥールの評価に合致するものではないことが明らかになった。それでもなおスローターダイクが「デザインの哲学者」であるとすれば、それは積極的な意味においてではなく、デザインについての思考が陥りうる二つの陥穽（一方では技術の進歩とともに（先進国の社会の一部に）もたらされた豊かさに目を奪われた多幸症であり、他方では、デザインを対象の表面の美化とみなす矮小化）について省察を促す反面教師としてなのである。

註

本稿では、ラトゥールとスローターダイクの著作を［　］内の略号で示し、算用数字でページ数を示す。本文における強調は太字で示す。

Bruno Latour, [CP] “A Cautious Prometheus? A Few Steps Toward a Philosophy of Design (with Special Attention to Peter Sloterdijk)”, in: Fiona Hackney, Jonathan Glynne, Viv Minton, *“Networks of Design”, Annual International Conference of the Design History Society, Sep 2008, University College Falmouth, Cornwall, United Kingdom.* Universal Publishers, 2009, pp. 2-10.（引用は以下のＰＤＦファイルから行う）http://www.bruno-latour.fr/sites/default/files/112-DESIGN-CORNWALL-GB.pdf

Peter Sloterdijk, [SC] *Sphären III, Plurale Sphärologie, Schäume,* Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2004.

Peter Sloterdijk, [ZM] „Das Zeug zur Macht: Bemerkungen zum Design als Modernisierung von Kompetenz“, in: *Der ästhetische Imperativ, Schriften zur Kunst*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2014.

*1 この講演は、二〇〇六年二月一〇日にカールスルーエ造形大学でのシンポジウム「Communication Next」において行われた。スローターダイクは、一九九二年にカールスルーエ造形大学が設立されたときより同校で哲学・美学を教えており、二〇〇一年から二〇一五年まではその学長であった。造形大学の名は、バウハウスからウルム造形大学へと引き継がれてきた名であり、一九九二年に設立されたカールスルーエ造形大学もまたデザイン教育を中心にすえている（この点について高安啓介氏からご教示をいただいた）。

*2 ラトゥールによる「事実の事柄」と「関心の事柄」の区別に関しては、以下の論考を参照。Bruno Latour, “Why Has Critique Run out of Steam? From Matters of Fact to Matters of Concern”, in *Critical Inquiry* 30 (Winter 2004), pp. 225-248.

田中均（たなか・ひとし）
一九七四年生まれ。大阪大学准教授（ＣＯデザインセンター／大学院文学研究科）。専門領域はドイツ語圏を中心とする近代美学、芸術における「参加」をめぐる諸問題。